

2023 年度 卒業論文

知識人批判に見る戦後日本の思想的欠点とその克服の方法

—— 加藤周一と鶴見俊輔を中心として ——

早稲田大学政治経済学部経済学科
高橋恭子ゼミ（ジャーナリズム系）所属
4 年 太田 健人（1A202058）

2024 年 3 月 11 日 提出

● 論文の概要 （本文より抜粋）

【研究内容】

現代社会における知識人の減少および不在は、多くの国に共通する問題である。その原因は複雑にして多岐にわたり、おそらく国によっても異なるだろう。しかし、殊に日本における知識人の不在を考える場合、その原因の一部は、日本の知識人やジャーナリズムそのものに内在していたと考えられる。彼らの抱えてきた日本特有の思想的欠点が、現代における知識人不在の問題はもちろん、第二次世界大戦中の知識人の責任問題にも直結してきたのではないか。

したがって本稿は、主として以下の問いに沿って論じられる。まず、国際普遍的な知識人の条件とは何か(第1章)。その条件に対して、日本で知識人とされる人々がどのような欠点を抱えてきたか(第2章)。そうした思想的欠点を、一部の日本人がどのように克服しようとしたか(第3章)。彼らの克服の方法は継承されうるのか(第4章)。

【研究結果】

以下は、冒頭で立てられた問いに対する筆者の暫定的な答えである。

第一に、国際普遍的な知識人の条件とは何か。海外の知識人論から筆者が導いた限りでは、「①専門に囚われない広い視野」「②生活と思想の連結」「③権力や組織に流されない自立的な態度」「④行動的な姿勢」という四つの要素に集約される。

第二に、その条件に対して、日本で知識人とされる人々がどのような欠点を抱えてきたか。戦後日本の知識人批判を総合することで、「①批判や責任の回避」「②論理の軽視と実際の重視」という二つの思想的欠点が浮かび上がった。前者は「権力や組織に流されない自立的な態度」、後者は「生活と思想の連結」の欠如を示唆し、テレビに代表される即時性の高いメディアはその負の側面を露呈させたと考えられる。

第三に、そうした思想的欠点を、一部の日本人がどのように克服しようとしたか。加藤周一(1919-2008)と鶴見俊輔(1922-2015)の場合、彼らは戦時中から日本の思想的欠点を見抜き、反撥心や孤独感を経験していた。加藤においては西欧思想および「偶然に死ななかった」こと、鶴見においては北米思想および「偶然に殺さなかった」ことが、互いの評する「原則性」を生ぜしめるに至った。

第四に、彼らの克服の方法は継承されうるのか。加藤や鶴見のような知識人像を現代に期待することはできないが、我々は社会の専門分化を受け入れながら極端な集団主義を拒み、同じ志向を持つ者とコミュニケーションを図ることで、その継承の命脈を保つことができるだろう。